

稲 山 会

通 信

第40号

2020年1月1日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

2020 年を迎えるにあたり

明けましておめでとうございます。本年が稲門山の会の皆様にとって良き年であることを願っています。新年には朝日が昇る風景が似合っていますので、南紀の宿で、太平洋に昇る朝日を撮った写真をお届け致します。



昨年 5 月 1 日に平成から令和に改元され、新天皇が誕生致しました。10 月 22 日には即位礼正殿の儀が執り行われ、天皇が即位を内外に宣明しました。昭和が崩壊と再生、平成が象徴天皇のもと平和の維持であったことを思い、令和も又、象徴天皇のもと



浩宮様、1987 年インド大使館にて

と平和を希求する時代であってほしいと思います。30 年以上も前の事です、新天皇が皇太子・浩宮様であった頃、山の国ネパールを親善訪問し、帰国時インドにも寄られました。駐在中の私は浩宮様にお会いすることが出来、時候のご挨拶を致しました。駐在していた奥様方は、若くてハンサムな浩宮様に魅せられ、人気タレントであるかのように接されていたことを思い出しました。この時の写真を添付しておきます。

昨年 8 月 17 日に、山の会会員の利籐暢（法学部 5 年生）君が、笛吹川東沢を下山中に事故に遭い亡くされました。利籐君のご冥福を祈るとともに、救助にご協力をいただいた山梨県警と東山梨消防本部に御礼申し上げるしだいです。

この事故の後、現役山の会として、登山のルールとしての「会則」を作ることになりました。然し山の会には「大衆性と研究性」を理念とした会則が創成期に作られています。この理念は多くの OB 達にとっての郷愁なので、新しい会則は「活動規範」あるいは類似の名称にする様、現役をお願いしました。山の会の会則はそれぞれの年代の名簿に添付されており、新井副代表が、50 年程前の黄色くなった「名簿・会則」を保管していました。現役の会員（M2：1 人、3 年生：7 人、2 年生：9 人、1 年生：13 人）が、この会則を読み、山の会のルネッサンスを進めてくれると嬉しいです。

2020 年 1 月 稲門山の会代表 斉藤雄二

総会・新年会のご案内

2020年の稲門山の会総会・新年会が近づいて参りました。皆様、同期及び年次の近いお仲間をお誘いの上、ぜひご出席頂き共に交友を深めたいと思います。最近ご参加されていない方もぜひご参加ください。旧交を温めるよい機会になることと思います。今年は、「ヒマラヤ遠征の思い出」のタイトルで、1971年のヒンズーラジ・ツイI峰遠征の様子をスライドをまじえて、森田生次OBと豊田紳二OBにお話しいただきます。皆様のご参加をお待ちしています。

日 時：2020年2月1日（土）午後3時～6時
場 所：早稲田大学大隅会館 201～202号室
会 費：6,000円（別途年会費 4,000円）

稲門山の会役員会

春のハイキング（陣馬山）のご案内

2020年春のハイキングはJR藤野駅を起点として、一ノ尾根から陣馬山に登るコースを計画しました。明るく開けた山頂から奥多摩や富士山の眺望が楽しめます。下りは明王峠、底沢峠を経て、陣馬高原下のバス停に下山します。明るい春の陽光の下、皆で楽しく歩きましょう。下山後は懇親会で歓談しましょう。ご参加をお待ちしております。

日 時：2020年4月5日（日） 9:40 集合
集合場所：JR 中央線 藤野駅前バス停（9:45 発和田行き）
行 程：藤野駅＝陣馬登山口～陣馬山～明王峠～底沢峠～陣馬高原下バス停＝
JR 高尾駅北口 （コースタイム 3時間25分）
幹 事：新井昭夫（S46年卒） araia@nifty.com 080-1161-5306
松村幹雄（S48年卒） mykof04@s5.dion.ne.jp 080-5175-9695

※参加ご希望の方は3月31日迄に上記幹事宛にご連絡下さい

利籐暢君の思い出

井上直斗（平成 31 年卒）

昨年 8 月 17 日、真藤幸暉（理工院 2 年）、利籐暢（法学部 5 年）、柳田野衣（社会学部 3 年）が笛吹川東沢を遡上し、帰りは沢を水と共に下るウオータースライダーを試みたが、トップの利籐君が法螺貝ゴルジュの 2m のナメ滝から滝壺に滑り降りた際、ホワイトウォーター（白く濁った渦巻き）に巻き込まれた。同行の真藤・柳田君がザイルを出して懸命に救出しようとしたが、利籐君は白く泡立つ水に沈んで見えなくなってしまった。やむを得ず尾根筋に出て、警察・消防に救助を求めたが、既に日没に近く、翌日の捜索となった。翌日早朝に警察・消防が出動して、8 時ごろに釜の中の利籐君を見つけることが出来たが、渦巻きが強力で、遺体が引き上げられたのは 13 時近かった。遺体は現場から県警のヘリで日下部警察署塩山分庁舎に運ばれた。以上は真藤・柳田君の報告書にある経緯であるが、OB 会役員会は事情を聴いた後、OB 会の報告書を纏め、記録として残した。以下に利籐君と同期の井上直斗君の「利籐暢君の思い出」を掲載する。（編集者）

利籐と私はお互いが大学 2 年生の頃に出会いました。それからというもの、共に、実に豊かな青春の日々を歩んできました。信頼の置ける同期でありながら、その一方で常に彼の明るく元気な人柄に尊敬を抱いていました。そんな彼とは、たくさんの山へ登り、たくさんのお酒を飲み、たくさんの楽しい時間を共に過ごしました。私が一足先に大学を卒業して早稲田を離れた後も、連休には一緒に山に登りに行ったり、SNS で連絡をとりあったりなど、変わらぬ付き合いをしていて、まさしく青春を共に過ごした友でありました。

葛葉川本流、軍刀利沢、槍ヶ岳北鎌尾根、冬季白毛門、冬季鳳凰三山、北アルプス全山縦走、冬季甲斐駒ヶ岳、鳥屋町沢、その他ハイキングやクライミングジムなど、一言では語り尽くせない程の実に多くの山に登りました。



北鎌尾根登攀中

その中でもいくつか印象深い思い出があります。その一つは、2018 年の夏休みに行った、北アルプス全山縦走です。この合宿では、利籐の周りを明るくする能力に改めて驚かされました。上高地から入山し、山に入ってから何日目か忘れてしまうほど日が経過した日、白馬岳のテント場に泊まった我々は、台風の接近で停滞を余儀なくされました。大雨でテントが浸水し、強風で揺れに揺れて中にいる我々にへばりついて来る、そんな過酷な状況でしたが、利籐が歌を歌ったり、笑いを取ったり、色々と喋ったりすることで、過酷ではありましたが、笑いが絶えずどこか楽しく過ごすことができました。常から思っていたが、彼の周りを明るく楽しくする能力に

改めて凄いなあと、感心させられた時でした。

そのような困難を明るく乗り越え、台風一過の次の日、晴天の気持ち良い中を白馬岳～梅海新道まで歩きました。通常のアルプスのイメージとは大きく違う梅海新道に感動させられたことは、今でも昨日のことのように思い出すことができます。そして梅海新道で一夜を明かし、翌日、晴天の日本海をついに見た時、皆んなで歓声をあげました。あれほど美しい海はこれまで見たことがなかったし、これからも見ることはないでしょう。最高の仲間と北アルプスを越えてきて、最後に見た日本海。いつまでの私の心の中で輝き続ける最高の思い出です。



北アルプス全山縦走を終えて：日本海

冬の南アルプスに行ったことも印象深い思い出です。鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳と二回ほど行きましたが、どちらでも、やはり利簾の周りを明るくする能力に助けられました。鳳凰三山を登った時、大寒波の襲来と重なり、寒くて凍えてる時、利簾がウイスキーを飲むと暖くなるぞと言って、一緒に山中で軽くお酒を飲んだことを思い出します。飲んだことで暖くなるというよりも、そのように楽しくひと時を過ごしたことで、気持ちが前向きに明るくなり暖かくなったことが強く印象に残っています。



天覧山でのザイルワーク：一緒に1年生を指導

利簾と過ごした日々は私の青春そのものであり、とてもここで書ききれものではありません。利簾がくれた膨大な素晴らしい思い出を受け継いでいきたいと強く思います。そして今の私があるのは、素晴らしい青春の日々をくれた利簾のおかげです。本当にありがとう。



冬の白毛門

投稿：鏡平山荘、有志山行での大澤支配人との交流記

金子治雄（S41 年卒）

北アルプスの鏡平山荘には、4年前から OB 有志山行を行う毎に毎年訪れて来ました。鏡平山荘は、わさび平小屋、双六小屋、黒部五郎小屋と共に双六小屋グループの一員で、新穂高から黒部周辺の主稜線に登るに格好の位置にあるため毎年利用して来たのです。小池新道から鏡平のコースは、百名山の鷲羽岳、水晶岳、黒部五郎岳の 3 座が稼げることと、槍穂の絶好の展望台の鏡池があるため、近年北アの人気コースとなっています。小池新道は鏡平山荘の大澤支配人以下小屋の従業員によって登山道が整備され、登りやすいのと、周辺の小屋の環境が良いため、毎年出会う女性登山者が急速に増えています。

4 年前私たち太郎良、島田、新井、金子各 OB は、登山道の素晴らしさを大澤支配人にお礼を申し上げて以来、毎年の交流が始まりました。今回この交流をご紹介した理由は、私たちが初めて鏡平山荘を利用した際、早稲田大学の会 OB 会と所属を名乗ったことから始まり、毎日不特定多数の登山客ばかりと接している小屋の立場では、名乗られると、とても嬉しいとお聞きしたからです。OB や現役の皆さまも鏡平山荘を利用する機会がありましたら、ぜひ山の会を名乗ってください。特別なサービスが受けられますよ。



昨年 2019 年もまた吉田、上原、佐久間、金子 OB の 4 人が、雲ノ平を目指して鏡平山荘にやって来て大澤支配人と再会しました。この前々日に利籐君の遭難連絡を受け、役員会副代表の島田、新井 OB は、急遽現地に向かうことになり、鏡平に来たのは 4 人だけでした。1 年ぶりにお会いした大澤支配人は、仕事を早めに終えて我々を談話室に招き、支配人秘蔵の数々のお酒で歓待して頂きました。趣味人で陶器の酒器に興味を持たれる支配人と、プロの陶芸家でもある吉田 OB との話の中で、吉田 OB が陶芸仲

間に声をかけ、鏡平山荘名入りの酒器を作ろうと話が太に盛り上がりました。



大澤支配人は、埼玉県出身で、山好きと匠に憧れ飛騨に来ましたが大工の腕を先代に見込まれ鏡平山荘の新築に携わり、以来支配人を務める風雅の人です。今回見せて頂きましたが、天気動きが一目で判る最新の米国のソフトを購入、夕食の際天気予報を行い、また佐久間 OB の手記によると、増水した小池新道の沢毎に、夜明けを待たず従業員を配置し誘導し、登山道を通行禁止の判断を行って、登山客の安全対策には責任を持って対処しています。

夜行バスの寝不足で登れた、小池新道の素晴らしさに感動

4年前、先の4人が鏡平・双六・三俣蓮華・黒部五郎・太郎平を縦走する山行の初日、夜行バスの寝不足で不安を抱きながら登り始めた小池新道には、平らな大きな石が階段状に、どこまでも敷き詰められていて、バテル事無く鏡平山荘に着き、難関の縦走初日を終えることが出来たのです。

宿泊手続きの時、責任者を尋ねて大澤支配人を紹介され、登山道の整備に対して、一登山者としてお礼を申し上げました。この登山道の感動はOB会HPに掲載し、後刻双六小屋事務所宛にお礼と山の会HPの記事を紹介いたしました。小池新道になぜこんなに感動したかと言うと、以前、白山や火打山で土木業者による登山道整備の大変さに出会ったことと、同期の杉村、沼田、小田、故秋野と60年前切り開かれて間もない小池新道の荒れた道を、黒部源流の遡行後、双六の天場から午後1本しかない新穂高発のバスに乗り遅れまいと必死で下った記憶があったからです。



16年夏、左から太郎良、島田、大澤支配人、金子、新井

初めて鏡平に泊まった年です。双六に向けて出発の朝、支配人を交えての記念写真です。



17年夏、左から後藤、太郎良、佐久間、大澤支配人、吉田、金子、新井OB撮影

この年は笠ヶ岳・双六・三俣・雲ノ平・野口五郎・烏帽子の縦走でしたが、笠ヶ岳登頂後、台風直撃のため雲ノ平は諦めて笠新道を下山しました。双六で合流予定の島田OBには、出発当日入山を諦めて頂きましたが、彼にとってはかえすがえす残念な山行になってしまいました。この日、大澤支配人からお酒の差し入れを頂き歓談しました。

18年夏、左から上原、吉田、新井、佐久間、後藤、島田、金子

この年は双六、三俣、鷺羽、雲ノ平往復の予定でしたが、鏡平山荘に上がった夕方、高野君の明神での遭難連絡が入り、全員が山行を中止し上高地日本山岳会山研で捜索支援に当たるため翌朝下山しました。この晩は大澤支配人にとっても心配して頂き、役に立たないがと山小屋間の緊急無線の回線を一晩中開けてくれていました。



学生時代を振り返ると、山の会の先輩たちは、山小屋や地元の宿との交流を積極的に行っていました。気象部の白馬定点観測では代々白馬館の番頭さんと親しく、後年私も引き継ぎました。背負子で思い出しますが、巻機山の清水部落と秤さんたち厚生部との交流も盛んで、部落に注文した大型背負子を使わないと、撤収し何倍にも膨らんだビニロンの重い冬冬は背負えませんでした。また10年前斉藤代表ら同期と訪れた5月の涸沢ヒュッテでは、早川先輩の名を告げたら、夕食時には、大型ワイングラスでの白ワインの大歓待を受けました。

投稿：2019 年 OB 有志夏山山行報告（新穂高～鷲羽岳）

金子 治雄（S41 年卒）

佐久間正昭（S43 年卒）

2015 年の白馬三山、16 年の鏡平～双六～黒部五郎～太郎平と続いた OB 有志の夏山は 17 年から雲ノ平を目指すコースを計画したが、この年は台風に阻まれ笠ヶ岳のみで下山を余儀なくされ、翌 18 年は初日の鏡平山荘にて夕食後、高野 OB の明神岳行方不明の報が入り、捜索支援で全員上高地に向かうことになり、縦走は中断という事態となった。

その 18 年のメンバーからリベンジの声が広がり、改めて同じ 7 人（後藤 OB は雲ノ平合流での個人山行）が雲ノ平を目指すこととなった。ところが出発予定日の前日、現役 5 年生で前幹事長の利籐君が笛吹川で行方不明との連絡が入り、先ずメンバー中の副代表 2 名（島田、新井 OB）が現地へ向かうこととなり、残る 4 名で当初計画を実行するべく新宿バスタに集合、出発した。事故の情報が直前だったため、前夜のメールを見ないで事情を知らずに参加した者もあった。尚、今回の山行計画とは別に、下山後上高地にて高野君の慰霊も予定していた。

当初パーティー：L 金子(S41)、SL 島田(S46)、SL 新井(S46)、吉田(S38)、上原(S43)、佐久間(S43)、
（後藤 S49 は個人山行）

当初行程：8 月 18 日 新宿発高速バス～平湯(乗換)新穂高温泉→わさび平小屋

8 月 19 日 わさび平→シシウド原→鏡平山荘

8 月 20 日 鏡平→弓折分岐→双六岳→三俣蓮華岳→三俣山荘

8 月 21 日 三俣→鷲羽岳→祖父岳→雲ノ平山荘

8 月 22 日 雲ノ平→黒部源流→三俣山荘→巻道ルート→双六小屋

8 月 23 日 双六→鏡平→新穂高→平湯(泊)

8 月 24 日 帰京

結果的に今年も大幅に計画変更を余儀なくされ、雲ノ平は本当に思い出の地となってしまった。

8 月 18 日

初日新宿朝立ちで、利籐君の状況が気になりながら平湯に向かう。平湯でバスを乗り換え今や馴染みの新穂高に着き、1 時間強炎天下汗だくになりながらわさび平に到着。これまで通過するだけだったわさび平小屋の内部は新築で驚くほどキレイ。宿の中にウォシュレットのトイレがあったのにはビックリ。



行程中の天候は確認するたびに悪化を告げ、どうやら予想外だった秋雨前線が停滞するらしく、利籐君の事故と重なって気持ちが暗くなる。電波が悪い中、夕方斉藤代表と交信し遺体が発見され収容されたとの報、その後の次第は未定とのことで明日の行程は一応計画通りとする。



8月19日

いわば毎年通いなれたこの日の行程、去年もここで休んだなあと思い出しながら休憩・写真をとりつつ進む。下りのパーティーには多く出会うが上り組はそう多くない。11時に鏡平山荘に着き、大澤支配人と1年ぶりの対面し個室を取ってくれた。食堂でビール等を飲んだ後、夕食前に仕事を終えた大澤支配人より談話室に誘いがあり、私は飲めないが、

皆で支配人秘蔵の酒で憩いの時を過ごす。

夕食後電波が悪い中で、やっとのことで島田副代表と交信、通夜、葬儀は未定との事、その後はSNSで交信することにして、早朝双六へ進むためと、皆酔っているため18:30と早めに就寝した。

8月20日

早朝起きて見ると島田副代表から22日通夜、23日葬儀のSNS連絡が入っており、協議の結果、金子と吉田OBは双六に向かわず下山、上高地で慰霊後帰京しお通夜、葬儀に出席することにして、残る上原・佐久間OBは悪天にもかかわらず、当初計画通り雲ノ平に向かうこととなった。

金子と吉田OBは縦走組を見送った後、6時過ぎに途中から本降りになった雨の中、縦走組を案じつつ、良く整備された下山路に改めて感心しながら辿る。途中、上高地の集中地に向かうに岳文会パーティーに路を譲りながら下山。新穂高に着くと雨が上がり、縦走組にSNS通信を行うも電波が通じずバスで平湯に向かう。

平湯で入浴後、日本山岳会山岳研究所を目指して上高地に回った。上高地山研で昨年夏の高野君の1次搜索と2次搜索時にお世話になった管理人の元川さんに、1年ぶりのご挨拶を兼ねて宿泊した。1年前元川さんは高野君のビバーク時最後の通信を行っており、自分が高野君を救えたのではないかと悩んでいた。翌日高野君の終焉の地のワサビ沢が正面に見える所で、慰霊を行ってから帰京した。

[以降 佐久間正昭(S43年卒)記]

8月20日

山行続行組は5時過ぎに出発、前日午後からの雨が段々強くなる。弓折分岐まではそれ程でもなかったが、双六の稜線では雨強くなり視界の効かない中、ただ平らなガレ地を歩き、何となくピークに出る。対向者は頂上で一人会っただけ。三俣蓮華から山荘に向かう下りでは、登山道が川の様になっており、始めは水を避けていたのが、その内諦めて水の中に靴を入れて歩くようになる。11時前、三俣山荘に着く。

受付では、先に着替えをしてからの手続きでいいですよと。まずは乾燥室で着替えをした後、受付を済ます。ここの名物は展望食堂。宿泊客だけでなく、休憩客も利用でき、上がって見ると利用者の垂らす水で床は水浸し。夕刻、しばしの間雨が止み、雲間から槍が見えて、皆カメラを構える。但し、小屋のディスプレイの天気予報は高山、富山の大雨洪水注意報を流している。翌日以降も雨の予報。夕食は名物のジビエシチュー、評判通りの美味さだった。

8月21日

天候回復見込みなく計画続行の場合、帰路の黒部源流が懸念されるため、雲ノ平行きを断念。目の前の鷲羽岳往復で戻ることとする。天気の様子を見ていたが雨足変わらずで、6時前ピストンに出る。稜線の風が強い、雨具のフードを手で押さえて歩く。登りの過程では身体の向きによっては風であおられよけるほど。頂上では小屋から前後していたカップルと雨中の記念写真を撮りあう。山荘に戻り、ザックの整理をした後、8:40 出発、雨模様は変わらずガスに包まれたまま、双六の巻き道を辿り、双六小屋 11:25 着。



例によって、乾燥室に走り雨具衣類を架ける。靴の中まで濡れているのは新聞紙を入れるが、十分乾かないことは承知の上。一段落後、持参のパンを食堂で食べる。今回は行動時間が短いため、用意した昼食は大分残った。小屋にはスペイン人男女のグループ、畳の談話室にサンダルのまま入って来る。夕食はこれまた名物の野菜のテンプラ。山小屋でこういうのが食べられるのはありがたい。夜半の雨音の激しさに明日の心配をしながら寝る。



8月22日

残念ながらの下山の日。雨の中、早く出る人もいるが、当方は今日中に帰京できればよいので、6時頃小屋を出る。7時弓折分岐、勿論視界不良につき、鏡平を目指し下る。7時40分小屋に着いたが、小屋には通行禁止の表示。支配人より「10時頃にはスタッフによる安全確認が出来る見込みにつき、それまで小屋に上がってくれてい

いから待機して下さい。今の状況での下山は命にかかります」との案内。しばらくスペイン人グループ（この後富士山に向かう由）と受付前のストーブに当たっていたが、長期戦になりそうなのでまた乾燥室に駆け込む。その内、乾燥室に衣類を取りに来る人あり、禁止の解除を知る。8:40、皆一斉にスタート、当方少し間を置き出る。途中、三か所で安全確認の小屋のスタッフに会う、ご苦労様。秩父沢出合近くの沢では、踏み石が完全に水流の中にあり、これでは一時通行禁止だったのも納得する状況だった。

12時わさび平小屋に着き一息。その後も結局新穂高まで雨のママ。平湯経由、17時発新宿行き高速バスで帰京。

この3年間の有志山行の経緯を考えると、どうやら雲ノ平山行は2019年で打ち止めか。

投稿：ヒマラヤ観光・紀行（マナスル・アンナプルナ）

斉藤雄二（S41 年卒）

学生時代にはヒマラヤを見るなどありえないと思っていたのですが、会社の悪戯で 1984 年にインドにバイクの合弁会社を作ることになり、抜擢されて（？）インドに駐在することになりました。販売店設定でカシミールに出かけて、高台からナンガ・パルバットを見たのが、ヒマラヤ 8000m 峰と対面した初体験でした。「八千米の上と下」を高校時代に読んだことがあり、ヘルマン・ブールにあらがれていましたので、カシミールの遙か彼方に長い稜線の真っ白なナンガ・パルバットを見た時は感激しました（写真①）。カシミールの首都・シュリナガールは、インドで最も美しい地域です。宗教はイスラム教なので、本来はパキスタンに所属すべきだったのかもしれませんが、この地域のマハラジャ（王様）がヒンズー教だったことで、インドに所属させたという歴史があり、現在は印パキの内戦が激化しており、日本人はこの地域には入れません。



①カシミールからナンガ・パルバット

インド駐在時代に、日本からの輸出は、ほぼ零のネパールに、インドからバイクを輸出することになり、カトマンズには何度か出かけています。カトマンズの財閥（ロイヤル系）を販売店にアポイントし、ネパールでのビジネスは成功しました。



②ヒマラヤの少女達

最初にカトマンズを訪ねた時、この販売店候補が、既にカトマンズでは有名人となっていた、エベレストビューホテル創設者・宮原たかしさん（現ヒマ観社主）を招待して、一緒に食事をする機会を作ってくれました。又、カトマンズ近郊の高台・ナガルコットに連れて行ってくれて、ヒマラヤの山々を、少女達と見ることが出来ました（写真②）。いずれも販売権を得る為の所謂接待です。

インド駐在時代にネパールには 3 度、定年退職後、トレッキングでネパール（ヒマラヤ）のエベレスト街道、パキスタン（カラコルム）のバルトロ氷河に行っており、それなりの経験はあるのですが、ネパールのポカラには行ったことがなかったので、昨年 2 月にカトマンズからゴルガ（グルカ）を經由して、ポカラに行くツアーに参加しました。喜寿を迎える年齢となり、山は見るだけになってしまいましたが、山の写真を撮る気力は残っていたので、良い写真が取れることを願ってクラブツ

ーリズムの観光ツアーに参加しました。家内も参加の予定でしたが、家内は体調がすぐれず、一人での参加になりました。期間は2019年2月5日から14日までの10日間でした。

このツアーの移動中は、常に右側にマナスルが見え、最後はアンナプルナを目前に捉えることが出来ました。カトマンズとパタンの観光の時は悪天で雨がよく降りましたが、ゴルガに着く頃、天気は急激に回復し、突然、霧が晴れて、ヒマールチェリ（写真③）とマナスルが見えた時は、もうこれで日本に帰っても良いとの気分になりました。



③ゴルガへの道で雨上がりのヒマールチェリ

ゴルガに着く前に、マナカナマの寺院にケーブルで登ったのですが、アンナプルナⅡ峰が雲のかなたに時々顔を出し、何とか確認できました。写真を撮るには、まだまだだいぶ遠くて、写真はあきらめました。それよりもヒンズー教の寺院では、山羊の血を神様にささげる神事があり、生きた山羊を寺院で殺生するので、少し生臭いところがあります。ところが私は生臭さを感じないので、友人から言われた「認知症の始まりは臭覚の減退」が当てはまるのかと、こちらの方が気になりました。

ゴルガの丘の上のロッジに2泊しました。ゴルガはバッキンガム宮殿の衛兵で有名なところですが、ゴルガ兵は勇猛果敢とのことで、太平洋戦争時に日本軍はゴルガ兵と戦ったのではないかと思います。このロッジでは気温が零度近いのに何も暖房具がなく、あるのは湯担保だけで、持ってきた衣類を全部着て寒さに耐えました。また着いた日の夜中、一晩中雷が鳴る悪天には参りました。ヒマラヤの雷は、すぐ近くに落ちるようで、迫力がありました。なぜこのような場所を選んだのか、添乗員の女性（残念ながらオバさん）に聞いてみたら、星空が綺麗だからと言われました。翌日の夜は



④ゴルガのロッジから朝のマナスル

快晴で、オリオン座等が手の届くような近くにありました。私は星座に興味を持つような品性はないのですが、星座が趣味の家内が来ていたら、喜んだことと思います。

ゴルガを出る朝、ヒマラヤは快晴で、ロッジのカフェ（食堂）に、真正面からマナスルが、左からアンナプルナⅡ峰が、右手からガネッシュヒマールの山塊が迫ってきます。マナスルは、風が新雪を巻き上げて、流れているのが手に取る

ようにわかります（写真④）。やっぱりヒマラヤは凄いやと思います、しばらくは動けませんでした。ロッジから下を見ると完全な雲海です。雲海の上に悠然と浮かぶアンナプルナⅡ峰を中心とする8000m近い山々は、まさに神々の山稜です（写真⑤）。



⑤ゴルガのロッジからアンナプルナⅡ峰

ゴルガからポカラに向かう為、ゴルガの町へ降りて行くと、かなり厚い雲に覆われていました。昼前に空は晴れ、バンディープの里山で、右手のガネッシュヒマールからヒマールチェリ、P29、マナスル（写真⑥）、アンアプルナⅡ峰、マチャプチャレ、アンナプルナⅠ峰が見渡せました。さらに左手にはかなり遠いのですが、ダウラギリも見ることが出来ました。アンナプルナⅠ峰（写真⑦）はポカラからは見えないので、ここから何枚も写真を撮りました。

⑥バンディープの里山から
ヒマールチェリ・P29・マナスル⑦バンディープの里山から
マチャプチャレの背後にアンナプルナⅠ峰

バンディープの潇洒なレストラン（写真⑧：名前は知らないが綺麗な花が咲いていた）で山々を見ながらステーキを食べ、ネパールの食事も良くなったなと感激し、里山を降りてポカラに向かいました。



⑧バンディープのレストランの花



⑨ポカラから朝のマチャプチャレ

常に右手にマチャプチャレがありました。マチャプチャレは神の山で、登頂は出来ません。イギリス隊が登っていますが、頂上直下で登頂はせずに戻っています。

ホテルの部屋から真正面にマチャプチャレを見ることが出来ます。端正な神の山です。到着後の夕暮れの、又朝起きての朝焼けのマチャプチャレを撮ることが出来ました（写真⑨）。マチャプチャレの意味は魚の尾ということで、頂上近くは2つに分かれており、魚の尾のように見えて命名されたようです。ホテルの屋上からはアンナプルナⅡ峰が真正面に見えます（写真⑩）。



⑩ボカラからアンナプルナⅡ峰

さて何故マナスルとアンナプルナに興味を持ったのか、高校時代の山岳部の顧問が、山の本をかき集めて図書館においてくれたので、先に触れた、ヘルマン・ブールの「八千米の上と下」をはじめとして、加藤喜一郎の「マナスル登頂」やモーリス・エルゾグの「処女峰アンナプルナ」を夢中になって読みました。この時の記憶が残っていたのかもしれませんが。

マナスル（8163m）は1956年5月9日に日本隊が初登頂しています。この時の隊長は槇有恒で、登頂者は今西壽雄（京都大学卒）とギャルソン・ノルブ（ネパール人）です。第2登は加藤喜一郎（慶応大学卒）と日下部實（早稲田大学卒）です。槇有恒さんのこの人事、日本とネパールのバランスを取り、大学のバランスを取る、まさに日本的です。チームワークの勝利で、このバランス感覚が、戦後日本の経済発展に寄与しました。高度成長期を体験した一人として、マナスル初登頂と、槇有恒さんの人格を高く評価する次第です。

一方で、アンナプルナⅠ峰（8091m）は1950年6月3日にフランス隊により初登頂されています。この遠征はアンナプルナを登るのか、ダウラギリを登るのか決まっていなかった手探りの遠征で、偵察の結果、ダウラギリは不可能ということで、アンナプルナになりました。アンナプルナは初登頂されましたが、払った犠牲も大きく、登頂者のモーリス・エルゾグもルイ・ラショナルも両手・両足に凍傷を負って、ほとんどすべての指を失っています。そもそも隊長のモーリス・エルゾグが登頂に向かうなどは、アルパインスタイルの先達とはいえ、チームワークの観点から見れば落第です。

この遠征には私達が若い頃憧れた、欧州アルプスのフランス人ガイド、3名が参加しています。ルイ・ラショナル、ガストン・レビュファ、リオネル・テレイです。ルイ・ラショナルは初登頂していますが、ガストン・レビュファやリオネル・テレイは見えてきません。下山時には、負傷の二人を助けて、雪盲になりながら大活躍したようですが。何かチーム内部で軋轢があったのでしょうか？ 日本隊に比べるとチームワークに欠けるようです。

高校時代はガストン・レビュファの本「星と嵐」を読んだり、リオネル・トレイの映画「アルピニスト岩壁を登る」を見たりで、この2人は私達が憧れた遥か彼方のフランス人ガイドでした。今回の山の写真を、同期の金子治雄に送った時に、フランスのアンナプルナ遠征にはガストン・レビュファやリオネル・トレイも参加していたと触れたら、こんなメールが返ってきました。

『他人には言いませんでしたが、曲がりなりにも私も皆様と同じく、一度はヒマラヤにあこがれていた時代がありました。高校時代はモーリス・エルゾグの「処女峰アンアプルナ」とか、ヘルマン・ブールのナンガ・パルバット「八千米の上と下」を仲間たちと競い合って読みふけりました。ヘルマン・ブールが旅費を節約するためにアルプスのアプローチに自転車を使用したことを知り、皆で日和田山まで自転車で行ったこともありました。その頃、リオネル・トレイの「アルピニスト岩壁に登る」が上映され、お互いに、レビュファとかトレイとかデメソン等、好みのアルピニストを名乗っていましたが、映画の中でトレイがハングを越える時に、彼のニッカーが我々と同じく、改造ズボンであることを知り、彼らも金がないのだと、大喜びをしたこともありました。』

若き日を思いだしつつ、この紀行を書きました。私は高度な登山は出来ませんでしたが、仕事で海外に4度駐在しており、世界の山を見ることが出来ました。定年後のトレッキングでは、エベレスト街道に行き、又カラコルムのバルトロ氷河の遡上もやり、今回のツアーを含めて8000m峰14座の内10座、大地に立って、自分の目で見る事が出来ました。時期が来たら、稲門山の会のHPに、自分の目で見た世界の山の報告をしてみたいと思っています。

さて最後にネパールですが、ずいぶんと近代化されました。女の子も可愛らしくなりました。パタンで撮った女子学生を参照してください（写真⑪）。私が30年以上前に、カトマンズのホテルに泊まった時、風呂のお湯は泥が混じっているような色でした。今は綺麗なお湯が出てきます。私が最初に持ち込んだインド製のバイクは、今やネパール中を走っています。カトマンズの町を走るバイクを見てください（写真⑫）。バイクは山に囲まれた国では、最高に便利な乗り物です。然しバイクが多くなり、都市の朝晩のスモッグは深刻な社会問題です。山が見えないカトマンズやポカラは悲劇です。人智でスモッグを解決してくれることを願って、この紀行を終えます。



⑪パタン観光中のカトマンズ大学女子学生



⑫ネパールの足、バイクが走る

秋のハイキング（高水三山）の報告

松村幹雄（S48 年卒）

令和最初のハイキングは10月6日(日)、奥多摩の高水三山に行きました。当日 JR 青梅線、軍畑駅前に集合したのは OB10 名でした。残念ながら、現役学生は8月の事故を受けて今後の活動を再検討中のため参加出来ませんでした。

曇り空の下、駅から踏切を渡り、川沿いに車道を歩きます。砂防ダムの先から山道に入りました。樹林帯の中をジグザグに登る急坂です。このころから先頭と後方の差がだんだんと開いてきました。尾根筋に出ると道は緩やかになり、東京都重要文化財の常福院に到着します。寺の裏手を登ると高水山まで一息です。急坂を下り、緩やかな尾根道を歩き、巻き道との分岐からまた登ると、三山中最高峰の岩茸石山（793m）の山頂です。晴天時は明るく開けた頂上もこの日は白い霧に包まれて幻想的でした。昼食休憩をとりながら最終組を待ちます。携帯電話が圏外で繋がりません。そのうち小雨が降ってきました。やや心配になり、分岐まで戻ろうかと話している時に最終組が到着しました。小雨の中、惣岳山へ向けて、岩混じりの滑りやすい急坂を下りました。また同様に尾根道を歩き、急坂の登りです。惣岳山から御嶽駅への下りも暗くなる中、濡れて滑りやすい道を慎重に下りました。ハイキングの最後は御嶽の蕎麦屋「玉川屋」で乾杯です。大正4年創業で文豪達にも愛されたと言う玉川屋の手打ち蕎麦はさすがに美味でした。皆様お疲れ様でした。



蕎麦屋「玉川屋」で打ち上げ

コースタイム

軍畑駅 10:03～登山口 10:30～高水山 12:00～岩茸石山 12:32(13:09)～惣岳山 13:47(14:18)
～御嶽 15:40

参加者

笠原（S40）、斉藤（S41）、上原（S43）、新井（S46）、島田（S46）、福田（S46）、
豊田（S47）、松村（S48）、加賀谷（S50）、倉川（S51）



霧にむせぶ岩茸石山山頂にて

訃報・編集後記

編集後記が追悼記になってしまうのは避けたいのですが、昨年の 5 月 26 日には青木一隆（S38 年卒）さんが、8 月 14 日には海野俊男（S41 年卒）さんが、10 月 13 日には迫田泰敏（S43 年卒）さんがご逝去されました。

青木一隆さんは私が新人の時の幹事長で、近寄りがたい雰囲気のある人でした。4 年生の時には夏合宿、雲ノ平集中のチーフリーダーであり、10 パーティー、80 名を統括しました。山の会の全盛期のリーダーでした。卒業後には、エクアドルアンデスに参加しています。富士重工（現スバル）の車両の方のエンジニアを全うされたと聞いています。

海野俊男さんは私と同学年ですが、2 年生の時に入会して、山の会では厚生部の後輩でした。私が 4 年生の 5 月連休に、厚生部山行、劔岳北方稜線のリーダーをやったのですが、彼がサブリーダーをやってくれました。三の窓で 2 昼夜の猛吹雪に耐えた仲間です。卒業後は銀行マンとして活躍されましたが、山行も継続されており、スイスのマッターホルンに登っています。

迫田泰敏さんは私が 3 年生の時に厚生部に新人として入ってきました。夏合宿は私のパーティーに参加してくれ、2 年生の 5 月に三の窓で 2 昼夜吹雪かれた仲間です。政治学を専攻し、政治部の新聞記者を目指し、読売新聞に入りましたが、社会部を経て運動部に移り、運動部長の要職を完遂しました。運動部時代は読売新聞が後援したエベレストやマカルー遠征等の随行者をやりました。彼が報道し、自らも大切にしていた記事が、世界的登山家、加藤保男と小林利明が厳冬期のエベレストで行方不明となった「エベレストに消えた二人」です。

さて登山家でもあった映画監督、谷口千吉さんと結婚して登山を始めたお姫様、八千草薫さんが、10 月 28 日、88 歳で亡くなりました。八千草さんはご主人と一緒に、ヒマ観のエベレストビューホテルに泊まられています。そんな関係で、10 年前の「ヒマラヤ観光開発 40 周年記念祝賀会」に出席されています。その時の写真を、この追悼の編集後記に載せておきます。

皆様のご冥福をお祈りいたします。

斉藤雄二（S41 年卒）記



八千草薫さん、ヒマ観 40 周年記念祝賀会にて



劔岳北方稜線、右から 2 番目海野・左端が迫田